

説教 『敵を愛する、驚くべく恵み』 山本 護牧師
聖書 ミカ書4：3／マタイ福音書5：43～45

今日は広島に原爆が落とされた日で、三日後には長崎にも落とされた。「落とされた」からといって、被害者面できるわけではない。その頃、隣国から見れば日本は残虐な加害者だったのだから。昔も、今も、戦争に正義は無い。武力の増大は悪の増大であり、武力による安寧は罪の安寧に他ならない。

イエスは律法の戒めを示し(マタイ5:43、レビ19:18)、それをひっくり返す。「しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい(マタイ5:44)」と。隣人間の愛を敵にまで広げよ、という意味なのか。かつてはここ甲斐の国と隣国の越後が戦い、幕末には「義」を旗じるしに遠方の会津と薩摩が戦った。日本国内が隣人になると、さらに遠方の「夷狄／外国人」が敵になった。「敵を愛せ」とは、この調子で隣人愛を広げて行けば戦争や憎しみが解消される、という見通しなのか。

否だ。敵を愛せとは愛の拡張ではない。他者を身内として親しく迎えるといった話ではない。イエスが伝統的な義の倫理をひっくり返したように、「愛の転換」とでも言えようか。敵や味方それ自体を消滅させる質的な転換によって、報復の連鎖を断ち切る。愛は拡張ではなく転換。つまり外側ばかりか内側をも刷新する。ゆえに私が、「隣人愛(レビ19:18)」という幻想から目醒めさせられる。

なぜ、秩序を崩すような愛が求められるのか。イエスはその理由を述べている。「あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである(マタイ5:45)」。この現実と、「敵を愛せ」とはどう関連づけられるのか。

私たちの日々において、神が働かれている現実を目をむけ、心を開き、その働きに参与すること。それが「敵を愛する(5:44)」ことの実践ではないのか。人の予測を遥かに超える神の働きに心開かれ、私たちは「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈る(5:44)」。罪は、憎まれることを求めており、愛されると衰弱する。迫害する悪は呪われることを求めており、祈られると弱体化する。これは他者のことであるより前に、私自身のことではないか。目前に起こっている神の働き(5:45)を知りながら、自己愛に拘泥して敵をつくるなら、憎しみに対して祈らないなら、私たちの罪は喜ぶだろう。

憎しみと報復の連鎖を断ち切って勝利した歴史として、ガンジーが指導した「非暴力(アヒムサ)」によるインド独立運動がよく知られている。ガンジーは、制度化されたキリスト教会には期待しなかったが、「敵を愛せ」と命じたイエスには深く共鳴していたらしい。圧倒的な武力を持つ英国は、インド民衆の「愛」に敗北した。憎まれず、呪われず、武力衝突が起こらず、ぐずぐずと敗北した。

「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする(ミカ4:3)」。これもまた「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈る(マタイ5:44)」行為ではないのか。そこではまず神の働きが宣言された。「主は多くの民の争いを裁き、はるか遠くまでも、強い国々を戒められる(ミカ4:3)」。誰にでも与えられる太陽や雨(マタイ5:45)が「奇跡」と分かる時、人は敵を愛するだろう。何よりも先に神の大胆な働きがあり、私たちはそれを真っ直ぐに、無償で、謙虚に戴くことで開かれる。愛も、平和も、永遠の命も。

《おまけのことば》

日々生かされている 彼らも 私も この奇跡を前に私たちは憎み合うのか 善人にとって十分な太陽 悪人にとって十分な雨 パンを二つに分ければ誰もが満腹する 罪はそれを独占する飽食